

# 生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

## 今月のピックアップ

### たいそう 大棗

#### タイソウとは・・・

ナツメ: *Ziziphus jujuba* (クロウメモドキ科) の果実で、ヨーロッパ南東部からアジア南部が原産ですが、日本へは中国からわたってきて古くから栽培されています。



ナツメの実 ↑

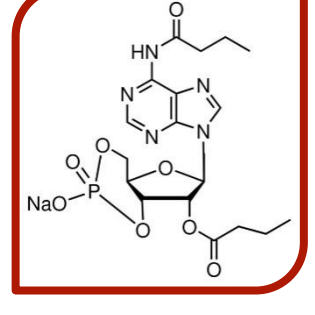
【性味】 甘・温

【薬能】 補脾益胃、養栄安神、緩和薬性

#### タイソウの成分と薬効・・・

5環性トリテルペン、ダンマラン型トリテルペンサポニン、多量の糖、中性・酸性多糖、高濃度の cAMP を含有し、皮膚上のアナフィラキシーの抑制、ストレス性胃潰瘍の予防などがラットの実験で報告されています。

右の構造式は cAMP (サイクリックエーエムピー) のものです。cAMP とは体内で合成される細胞内情報伝達物質 (セカンドメッセンジャー) で、プロテインキナーゼ (PKA) という物質を活性化させることによりある種のタンパク質のリン酸化を促すことで生理反応 (心臓の筋肉の収縮力増大や心拍数の増加) を発揮する物質です。



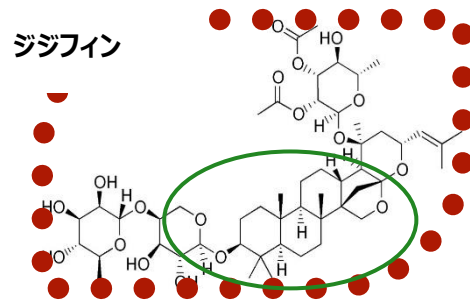
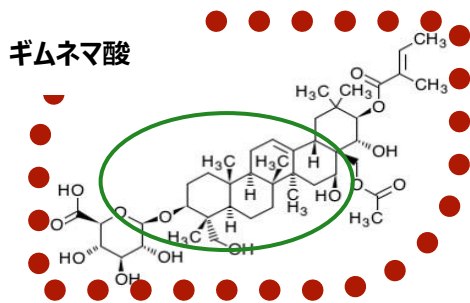
↑ ナツメの実を  
乾燥させたもの

以上のことから、この物資が体内で重要な役割を担っていることが伺えますが、**タイソウ**の薬能の広さはこの物質によるものも大きいかもしれませんね。

ナツメの葉に含まれるトリテルペン類である、ジジフィンという成分もなりユニークな特徴を持っています。実は、ナツメの葉をしばらく噛んだ後に甘いものを口に含んでもその甘みを感じません。同様な作用で有名な『シルベスタギムネマ茶』というお茶をご存じでしょうか？この茶葉に含まれるギムネマ酸という成分がジジフィンと同じく甘味受容体の働きを阻害するためにこのような反応が起こります。機会があれば一度試してみてください。

下記はギムネマ酸とジジフィンの構造式です。薬学的にはこの2つの構造式を類似しているとみなします。一般的に類似した構造式を持つ化合物は、その作用も類似する点があると判断することが多いんです。

化学に興味のある方はぜひ相違点など見比べてみてください。



## タイソウを含む方剤・・・

かっこんとう

**葛根湯** (感冒、鼻かぜ、炎症疾患、肩こりなど)

かみきひとう

**加味帰脾湯** (心身が疲れ、体力が低下し血色が悪い人の貧血、不眠症、精神不安など)

はんげしゃしんとう

**半夏瀉心湯** (急性慢性胃腸カタル、発酵性下痢、消化不良など)

ほちゅうえつきとう

**補中益氣湯** (元気がなく胃腸の働きが衰えているものの虚弱体質、疲労倦怠、病後の衰弱、食欲不振など)

りっくんしとう

**六君子湯** (胃炎、胃アトニー、消化不良、食欲不振、胃痛、嘔吐など)

## タイソウとその仲間・・・

『サネブトナツメ (実太棗)』はナツメと同属植物ですが、『サネ』とは種子のことを指し、種子の大きなナツメということで、これも**サンソウニン (酸棗仁)** という名前で重要な生薬として知られています。ナツメはこのサネブトナツメに比べると弱く、種子ができないこともあるため、ナツメの栽培には野生に近く強いサネブトナツメに接ぎ木した苗を用いることもあります。

大阪府下では**河内 (かわち) タイソウ**が流通していたこともあり、中国産に比べると小粒でしたが肉厚で良品とされていました。現在では生育に手間がかかることもあり生産されておらず、生薬として市場に出回っているのは中国産です。また、ナツメヤシ (デーツ) という果物は干し柿のような少しねっとりしたドライフルーツで中東などではよく食されているものですが、これはナツメとは全くの別物で、ヤシ科の植物の果実です。

